

第三百六十回 青葉会

平成二十八年三月二十四日(木)

午後五時半〜八時半

丸紅来客食堂(談話室)

〈顧問〉

- ☆ 川合万里子 先生
- ◎ 川口孤舟

〈出席者〉

- 今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 川口孤舟 後藤保明 小西弘子 豊田ゆたか 中野一灯
- 山崎亜也 山内天牛
- 伊賀山そらお 久米五郎太 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 星田啓子 宮内規雄
- 渡邊盛雄

〈紙上選句〉

- 赤田堅 安部眞希子 楠田彦十 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 福島正明 村田くに子
- 山崎青史 山本三恵

《互選句》

九点

- ☆◎ 斑雪野(はだれの)や山陰線の手動ドア 堂哉 (眞・万・孤・灯・允・く・正・青・天)

六点

- ☆◎ 納戸から出されて眩しげ難の顔 保明 (万・孤・彦・ゆ・亜・天)
- (☆:お難様も大勢おられますから、お内裏様が代表して↓「納戸から出され眩しげ内裏難」)

五点

- ☆◎ キャンパスにあふるる袴花三分 一灯 (眞・猛・孤・正・亜・青)
- ☆ 蒼穹へ合掌を解く白木蓮 孤舟 (万・彦・灯・允・三)
- (☆:青空に在る白木蓮の蕾が花へと解(ほぐ)されてゆく描写が面白い)
- ☆ 杖買ひて伸びし歩幅や山笑ふ 恵洲 (猛・万・彦・保・ゆ)
- ◎ 土筆摘み母と二人の幼き日 保明 (猛・忠・万・弘・龍)
- (☆↓「幼(をさな)われ母と土筆を摘みし日よ」)

四点

- ☆ 古都占領華人和装の梅日和 紀久男 (猛・万・龍・敏)
- (☆↓「梅日和和装の華人が古都を占め」) (中国の若いカップル)
- ☆ 枯古木今年も花を抱(いだ)きけり 猛 (堅・万・龍・ゆ)
- 僧にまだ少年の顔春寒し 孤舟 (彦・保・敏・天)
- 窓に蜂這ふままゴトン電車出る 弘子 (眞・保・灯・天)
- ☆ 武田菱きらめく鴟尾(しじ)や風光る 一灯 (万・弘・く・青)
- ☆ 法名を受く三兄弟に初音かな 紀久男 (眞・万・彦)
- (浄土真宗では生前に法名を没後の戒名を授けるキャンペーンをしております)

三点

- ☆ 立女形(たてをやき)へ手締め華やぐ春襲名 紀久男 (万・彦・敏)
- 癌検査終へて眩しき花一分 忠彦 (紀・弘・ゆ)
- ◎ 三代の句碑睦まじき立子の忌 弘子 (紀・孤・く)
- 水車にて蕎麦碾(ひ)く里やうらけし 恵洲 (紀・正・青)
- ☆ 背伸びしておおづと蛇穴を出づ 昇 (万・天・三)
- (☆:「おおづ」がいい。中七↓「蛇おおづと」)
- ☆ こぶしかな白木蓮かなとひとしきり 啓子 (堅・紀・允)
- ☆ 水ぬるむ暫し忘れし釣意出づ 亜也 (忠・万・三)
- (☆:上五で終止形をとると三段切れになる↓「水温み:」)

二点

- ◎ 柳青み小舟行き交ふ西湖かな 盛雄 (紀・忠・万)
- ◎ さらげなく西行を追ふ弥生かな そらお (孤・く)
- (10年前の杭州旅行の思い出)

母の背で赤子の眠り木の芽風
強きもの女三代雛飾る

忠彦 (保・く)

全 (弘・三)

☆ 再会の逸(はぎ)るときめき花の下(もと)
(☆: 中七の語順を変えて「ときめき逸る」)

孤舟 (紀・万)

◎ 木の芽和え顔に近づけ季節嗅ぐ

保明 (龍・敏)

磯の香を纏ひし軒の干鰯

ゆたか (孤・灯)

花に雪孤高の天主鶴ヶ城

全 (堅・猛)

☆ マネキンの襟首あやか春灯(ともし)

一灯 (万・亜)

(☆: 「あやか」は「あえか」では?)

☆ 幼子と風を友とし風車

規雄 (万・允)

(☆: 詩のリズムに緩急をつけてみたい「風車幼(をきな)と風を友として」)

晩酌の目刺し焼きつつ父偲ぶ

そらお (忠)

菊五郎の代役・菊之助の「三浦之助」

☆ 山したたる若武者ぶりやジワを呼ぶ

紀久男 (万)

(☆: 「ジワを呼ぶ若武者ぶりや山したたる」滴るような緑の夏山は若武者に似つかわしい)

☆ 春場所や大関目覚め大入りに

全 (万)

☆ 春愁や事故と事件の絶えざりし

猛 (万)

(☆: 「絶え間無き事故や事件や春愁ひ」)

☆ 花冷が花の寿命を延ばしけり

全 (万)

(☆: 「花冷や花の寿命を延ばしつつ」)

☆ 魔の海が恵みの海に春五度(たび)

忠彦 (紀)

☆ 余寒の茶室鉄瓶の滾(たぎ)る音

孤舟 (万)

(☆: 「鉄瓶の滾り音余寒の茶室かな」)

仁左衛門・孝太郎の舞踊

☆ 春うらら父子が踊る団子売

五郎太 (紀)

☆ 春浅し銅鑪叩く軽き音(燕市にて)

全 (く)

☆ 通う猫手傷だらけで朝帰り

保明 (万)

(☆: 恋猫が季語であろうが「通う猫」ではなく「通ひ猫」)

☆ 涅槃絵の嘆きの口の深き黒

弘子 (敏)

☆ 團子屋に醤油焼くる香牡丹の芽

全 (天)

☆ 春眠や勤勉の神許されよ

健介 (紀)

☆ 春眠や綱を締めたる稀勢の里

全 (堅)

☆ 天空に浮かぶ連山湖上春

ゆたか (堅)

☆ 連翹の黄の連なれる中央道

啓子 (万)

☆ 花を呼ぶ愛しき雨の暖かさ

全 (万)

(☆: 「花」は「さくら」「暖か」共に春の季語なので季重なり。季語は一句に一つ)

☆ 諦めた筈の鉢にも芽吹く春

全 (猛)

☆ 南国ははや山肌に山桜

全 (堅)

☆ 風車に乳母車の子目を細め

規雄 (万)

☆ 初音聞く思ひの外の大音量

亜也 (万)

☆ 野火止(のびと)むと謂ひし用水古利過ぐ

全 (三)

☆ 巢は何処一枝銜(くわ)へて鳥跳ぶ

全 (紀)

☆ 小一時間黙もくせせる松葉蟹

天牛 (万)

(☆: 「黙々と松葉蟹せせる小一時間」)

☆ 閨(うるさ)日や春二番てふ風吹けり

全 (万)

☆ 文旦を三つ抱へて兒は真顔

全 (保)

●次回青葉会

四月二十八日(木) 午後五時半から八時半

丸紅 コンチエルト(談話室)

▲当季雑詠五句 投句二句 ◎年会費徴収します

五月二十六日(木) 井の頭公園吟行

以上文責 紀久男

平成二十八年三月句会報

一 今回は天牛さん以下10名出席。投句9名。副島さんからお借りした伊藤忠兵衛さん（俳号疇坪）の句集『芦の芽』（昭和37年5月・大日本印刷）、恵洲さんらの山紫会第二十七歌仙「秋の蝶の巻」。稲垣真澄さんの新刊『現代布教キーワード176』（興山舎・2016・4・8 ¥2,900）を回覧し乍ら、盛雄さん寄贈の「伊丹諸白純米吟醸」（小西酒造の長寿蔵）、忠彦さんの純吟「石見銀山」（島根・大田）、小生の山麿吟醸「米鶴」（山形）そして弘子さんのローストナッツ（GRAMERCY）を賞味しつつ開会。御覧のように堂哉さん、一灯さん、保明さんの三氏が高得点でした。

二 関係者近詠

古里の凍み豆腐炊き誕生日	万里子	談春の満場沸かず初笑	紀久男
よちよちと掌 <small>（てのひら）</small> ほどの残雪へ	全	立見出る昼夜通しの初笑	全
大寒の月暈仰ぎ米寿かな	全	――「萬緑」――	四月号
二月早 <small>（はぎ）</small> 半値セール <small>（半値）</small> の続く路地	全	百年の先は大樹よ松の芯	盛雄
借畑に白菜育つびつしりと	全	春場所や力士の動悸一直線	全
手土産に蔦の蔓摘みクラス会	全	霾や肺がん再発今三度 <small>（みたび）</small>	健介
猿山に毛繕ひ合ふ猿のどか	全	荒海の浜に挙 <small>（こぞ）</small> りし松の芯	紀久男
年頭の夫は一族の長の顔	全	身の証し陽炎のごと無縁仏	盛雄
新札で捧ぐ献金水仙花	全	生きているこれも証か春の風邪	健介
平和へと付けまつげ上げよ成人日	全	被災地の日永いそしむ船大工	紀久男
つぎ当ては今パツチワーク冬董	全	――きさらぎ句会3月――	
加齢とは献血満了寒椿	全	おぼろ夜や昨日治した歯が痛む	正明
頤へマスク警官ホイッスル	弘子	啓蟄や新幹線が海潜る	全
枯原へねずみはねずみの音させて	全	花冷えや数が足りない保育園	全
焼諸割れば柱状節理ほかほかと	全	「初音よ初音」庭よりはづむ妻の声	允章
ゆりかもめ集め孤独を立たせをり	全	梅が香やゆつくり上る夜の家路	全
若水やあんな高みに星のゐる	青史	旅に居て地酒を酌むや西行忌	全
臥せる妻包丁始とて起ちぬ	全	感恩や菩提寺庭の初桜	紀久男
冬の蜂往生際をとぼとぼと	全	先達の句集に感銘冴返る <small>（芦の芽）</small>	全
吉凶のあはひに睦月尽きにけり	全	花見せず畏友の著書にのめりこむ	全

三 伊藤忠兵衛さんの句集『芦の芽』を恵洲さんに薦められて拝読。30数年前、俳句初学の頃、瞥見した憶えあるのですが、今度改めて精読し感服しました。芭蕉の格言「自然を師とすべし」を守つて句作の対象を自然に限定。青木月斗、原石鼎（せきてい）に師事するも添削を固辞。山口誓子、長谷川素逝（そせい）らと句作習練。事業繁多で句作を中斷した時期もあつた由です。恵洲さんの御感想：「品の良い写生句が多い」に同感です。小生好みの句を抄出してみました。

元日の寝ものがたりを兵の吾子と <small>（昭15）</small>	ムンスーンの名残のうねりG.o.aを過ぐ <small>（昭9）</small>
手洩かむであたり寂たる田打かな <small>（大15）</small>	北支駐屯
臉白う小鳥雨に眠りけり <small>（大10）</small>	日盛りの石炭につく蜻蛉かな <small>（昭3）</small>
日盛の号外に見る大伏字 <small>（昭12）</small>	あはれ吾子ネルにねまりて柿喰ふ <small>（昭15）</small>
鯖鮓の鉢に沈めるふかみどり <small>（昭2）</small>	丸紅飯田創業百年祭に寄す
塘波埠頭入港	人のかほみな菊に似て菊日和 <small>（昭33）</small>
船着けば昼寝のむくろ起きにけり <small>（昭3）</small>	うろくづは雪にみじんの光はなつ <small>（昭13）</small>
花売の出で次ぐ村の狭霧かな <small>（大15）</small>	茶事即景
露の穂やもゝしきの湖はろかなる <small>（昭4）</small>	大破れの大甕のみし寒牡丹 <small>（昭12）</small>

平成二十八年四月十二日

紀久男記